

いじろのとも

第三卷

三月号

命奪われた二人の幼子

誰なのか
二人の子ども
連れ去って
幼きいのち
無惨にも
奪ってしまい
捨て去った

叫んだだろう
助けてーえ！
叫んだだろう
おかあさーん！
叫んだだろう
おとうさーん！
助けに来てよ！
おとうさーん！

その声とどかぬ
犯人の
狂ったところ
無情にも
二人の首に
手を掛けて
憎しとばかり
絞め殺す

ああ哀れかな
哀れかな
思わず涙
流れ落つ
どうか二人を
極楽へ
お救い下さい
天の仏よ

ひとつで悩みたくない人は

二、いつも「和顔愛語」を欠かさないこと。

「和顔愛語」は、「わけんあいご」と読みます。先月号の「布施」と同じように、仏教ではとても大切にされてきた言葉です。

その先月号でいわゆる、あげるものが何もなくても誰でもが出来るお布施として「無財の七施」のことを紹介しました。その中に和顔施（わけんせ）と言辞施（ごんじせ）の二つが含まれていることを述べました。また、それらに関連するものとして眼施（げんせ）がありました。今月号の和顔愛語とほとんど同じ意味です。先月号でお確かめ下さい。

さて、この和顔愛語という言葉の意味は、もうお分かりだと思しますので、解説はやめておきます。ここではこの言葉を大切にされた道元禅師（日本曹洞宗の開祖）の正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）という本から、愛語のことが書いてある部分を紹介してみたいと思います。実はこの愛語は、子どもとよく遊んだことで有名なあの良寛さん（岡山県玉島円通寺で修行した曹洞宗の僧）も、とても大切にされ、正法眼蔵の中の、この愛語のことを説明している部分をよく人に書いてあげました。ま

た、良寛さんは、この愛語を「戒語」として発展させ、言っではならない多くの言葉を箇条書きにして書き出しました。それはこのシリーズでも取りあげる「六、しゃべる言葉を慎むこと」にあたっていますので、七月号で紹介することにしたいと思います。

それはさておき、正法眼蔵の愛語が出てくるところで、それは「菩提薩捶四撰法（ぼだいさつたししょうぼう）」の部分です。菩提薩捶は菩薩のことです。四撰法は、菩薩として行うべき四つの大切な方法という意味です。その四つの方法とは何かと申しますと、布施、愛語、利行（りぎょう）、同事（どうじ）です。

布施と愛語はよいとして、利行と同事を説明しておきます。利行は体（身）と言葉（口）と心（意）で人々に利益をもたらすことです。私たちは悲しいかな相対的で、いつかは死んでいかなければなりません。ですから、相対的に「人より少しでも自分がよいこと」を喜ぶ傾向があります。相対的にという意味は、自分がよくなる場合と、ひとが悪くなつてその分自分がよくなる場合があります。他人の不幸を喜び、他人の幸福に腹を立てることがこれに当たります。ですから、人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみにすることはとても難しいことなのです。この利行は、それを克服しなければなら

ないことを教えています。それを克服して、自分が骨をおつて、あるいは自分が損をしても、他人が利益を得るようにしてあげなければならないことを教えているのです。

次に同事ですが、これは、相手と同じ立場に身を置くことです。相手に和することだと言ってもよいと思います。自他の統合であり、社会的な結合です。そして、そうした統合の中で、人と一緒に協同して何かをなすことなのです。大日如来さまが衆生を救うために姿を変えて、釈尊としてこの世に生まれて来られたのも同事と言えるのです。

さて、道元禅師が愛語について書かれた部分ですが、これは、良寛さんも人さまに書いて差し上げてくらすから、とても大切な言葉です。すこし長くなりますが、ここでも現代語訳にして紹介しておきます。

* * *

愛語というのは、人々に接するときに、先ず慈愛の心を起こし同情の心をもって、相手の身になって慈しみの言葉を掛けることです。どんなものでも、暴言や悪言をばいってはなりません。世間には、お互いに安否を問う礼儀があります。また仏道にも「珍重（ちんちょう）」の言葉（禅僧が、会ったり別れたりする時に言う挨拶の言葉

で、「おはよう」「ごきげんよう」「さようなら」「ではお大事に」「どうもお手数かけました」「どうもありがとう」と言う意味で使う言葉）がありますし、また目上の人に挨拶する時に言う「不審（ふしん）」という言葉（同じように禅僧が「ごきげんいかがですか」という意味で使う言葉）があります。また、人々に接するときには、赤子に接するような慈しみのおもいをもって言葉をかけることが、愛語というものです。徳がある人は、ほめなければなりませんし、徳の無い人は、気の毒な人として、哀れみの情をもって温かく接しなければなりません。

愛語を好んで心掛けていれば、だんだんと皆の中に愛語の行いが広がっていきます。そうすれば、日頃知られていないような愛語や見られなかったような愛語が出てくるものです。

私たちは、いまのこの身が続く限り、好んで愛語しなければなりません。未来永遠に、不退転の決意で行わなければなりません。そうしていれば、たとえ相手方（国の統治者）が、こちらを敵だと怨んでいるような場合でも、心を開いて和睦することが出来るようになるでしょう。それが、愛語の根本的な力なのです。

直接に目の前で愛語を聞けば、表情が柔らかくなり、

心が楽しくなつて来ます。さらに、陰でささやかれた愛語を聞けば、嬉しいこととして、いつそう深く肝に銘じ、魂に銘じることになります。

私たちは気付かねばなりません。愛語は必ず愛情の心から起ります。そして、その愛情の心は慈しみの心のもとになつて居るのです。ですから、愛語は天をひっくり返すほどの力があるのです。単に相手の長所をほめるだけのものではないのです。

* * *

すこし長くなりましたが、この引用文をよく味わつて頂きたいと思ひます。良寛さんは、その当時、ほとんどの人が見向きもしなかつた、この正法眼蔵を、夜、お香をたきながら読んだそうです。あるとき読んでいて、涙がとどめなく流れ落ち、本がぐつしよりとぬれてしまつたそうです。そのあくる朝、隣のお爺さんが尋ねてきて、それを見つげ、どうしたのかと聞かれました。しばらく返事ができなかつたのですが、やつとの思いで昨夜雨漏りがして濡れたので、と応えた詩にうたつています。修行によつてそれほどまでに、心の垢が落ちて、感受性がとぎすまされていたのだと思ひます。ですから、当時（江戸時代末期）の坊主の墮落ぶりには、ひどく腹を立てています。

人は、よい人を感じて、よい人になります。勿論、悪い人を感じれば、悪い人になります。ここが人間社会のこわいところです。人が感じる情動は、伝染病のように、人から人へと伝染していきます。一家の中に明るい人がいれば自然にその家は明るくなつてきます。でも逆に、暗い人がいますと自然に暗くなります。愛語も情動の表現ですから、道元禅師がおっしゃる通り、皆の中に広がっていくのです。

二月二十三日（日）の朝七時三十分から、例によつて

NHK教育テレビで「こころの時代」を見ました。テーマは「慈しみの海」という題でした。講師は中村元氏でした。その中で、仏の慈悲の実践者として忍性菩薩（にししょうぼさつ）の話が出てきました。一二一七年から一三〇三年の人ですが、とても多くの社会福祉事業をした人であることを知りました。貧窮者やらい病（ハンセン病）患者の救済だけではなく、馬のための病院も作つたそうです。また、絹は、まゆから作るもので、一切身につけなかつたそうです。それほど人間だけではなく、あらゆる生き物に慈悲の心を施されたと知りました。また、それを語る中村氏の声は、おえつに近いものでした。こちらにもその情動は伝わってきました。あの尊敬する中村氏が七百年も前の人に感動して語るのですから、よほ

ど忍性菩薩は偉かったのだと思いました。一度、調べて書かれたものを読みたいと思いました。

人は、人の心に感じます。自分を捨てても、人のために尽くす、その温かい心に感じます。人への優しい、思いやりの心に感じます。それは、時代を越え、国を越えて生き続けて行くのだと思います。日本が今、世界に貢献出来るのは、もつと欲しい、もつと儲けたいと貪り続ける経済によつてではなくて、世界に類を見ないと言われるほどの社会福祉事業をなした忍性菩薩の、あの慈悲の心ではないでしょうか。

ここで述べました愛語も、もとは慈悲の心から出るものです。心の伴わない言葉は空虚です。そらぞらしい限りです。

自分への執われを捨て、心から人のことを思って、いつも優しい表情をし、微笑みを絶やさず、だれかれの区別無く思いやりの視線を投げ掛け、いつでも笑っていたいものです。そして口を開けば、優しい言葉がいつでも出て来るようになりたいものです。

そうしていたら、知らないうちに回りの人が皆温かい人になっていて、人で悩むこともなくなつて行くのではないのでしょうか。

自作詩短歌等選

「村は三・三・七拍子」

現在の

村にあるもん

演ずれば

農業ばなれ

村ばなれ

家庭ほうかい

村ほうかい

選挙さわぎに

色さわぎ

わてら観るもん

あぜんとし

何にも先が

見えて来ん

長生きやしたく

ないもんじゃのう

平和の訪れ

誰かれの

区別もなしに

ここから

触れ合いますれば

世の中に

自ずと平和

訪れて来ん

磨かぬ仏性

誰でもが

生まれながらに

頂いた

仏性磨かぬ

もつたいなさよ

ああ

もつたいない

もつたいない

業

おのおのが
持ちて生まれし
遺伝子と
育ちし環境
業を作りぬ
業ふかき
多くの人の
苦しみは
解脱せぬうち
続きおりける
ひたすらに
仏求める
修行のみ
業から抜ける
手だてと成りぬ

梅

黒き枝
白やピンクの
梅の花
こころの傷
われわれが
からだに受けた
傷ならば
傷の癒えるに
従いて
やがて痛みも
消え去りて行く
だがしかし
こころに受けた
傷ならば
どんなに時間
たとうとも
痛みたやすく
消えては行かぬ

だからこそ
こころ大事に
していこう
たとえ自分が
傷ついても
人にはじつと
我慢をしよう
そうすれば
いつしか相手も
気がついて
謝る時が
訪れん
許せる時が
訪れて来ん

傲慢な人の哀歌

傲慢に
自分偉しと
思う人

欠点指摘は
されずとも
たったひとこと
反対の
意見
言われれば
十分に
いかり頭に
浸透し
ますます過ち
重ね行く
ああ悲しかな
悲しかな
縁なき衆生か
ああ悲しかな

自作随筆選

徳は知なり

昨日の一月二十九日、鳴門の錦屋さんで古本を九千円ばかり買ってきました。その中に村井実著作集四「道徳は教えられるか 道徳教育の論理」(小学館刊)があります。読んでみてあきました。その一つは、ソクラテスを間違えて読んでいること、もう一つは、道徳教育で人格を完成させることを言いながら、人格とは何かについての明確な意識がないことです。後者については、どんな教育学者もそうなので、ここでコメントとすることはやめておきます。

それでは、ソクラテスを間違えてとっている件ですがそれは、『ソクラテスが「徳は知識である」と述べている』として点です。そして『これはおかしい。なぜなら、徳には実践が伴わなければならないのに、知識は実践ではないから』という点なのです。ところが、ありがたいうちに『アリストテレスは「徳は一部において知識であり、一部において習慣である」と新しい考え方を提案してくれている。だから、私はそれを採用して道

徳論を展開して行くことにする』と述べているのです。

「徳は知識である」という命題は、アリストテレスが言ったものなのか、この著者自身が言ったものなのか、調べてみないと分かりませんが、私が読む限りでは、ソクラテスはそのようなことは言っていないのです。そこが間違っているのです。

そう言っているのではなくて、ソクラテスは、「徳は知である」と言っていると思うのです。ですから、この著者は「知」と「知識」を同じものとみなしているのだと思うのです。実は、この二つの言葉は、全く異なった、逆の意味を持っているのですが、そのことに不幸にも世間では超有名なこの著者も気付いていないのです。

ソクラテスの有名な言葉に、「汝自身を知れ」と言うのがあります。別の言葉で言い換えれば、「自己の無知を知れ」ということです。つまり、自分が色々知識を持っている、知っていると思っているが、実は何も知らないのだ、ということを知らなければ、徳が備わって来ないと言っているのです。これが、矛盾しているようですが、「徳は知なり」という命題の真の意味なのです。ですから、知は知識とは相いれないもの、知識を否定するものになっているのです。そのことにこの著者は気付いていないのです。

なぜでしょうか。それは大抵の人にとって、知識をもっていることは、いつもよいことである、という科学万能の時代に生きる現代人特有の先入観があるからなので

す。

実は、人間は知識で知れば知るほど、自分が知ったと思えば思うほど、それに執らわれて、自分の中に埋もれて自分を見失って行くものなのです。そして、それに自ら気付くことは、とても難しいものなのです。自分はそれでよいと思ってしまうものなのです。

ソクラテスは、そのことを気付かせようとして、問答法という対話の形式を用いて、アテネという都市国家の、主として若者を説得したり、教育して歩いたのです。その結果、無知を指摘された多くの人の恨みや妬み、中傷をかってしまい、ついには訴えられて裁判の末、死刑の判決をうけてしまったのです。

多くの人がソクラテスを誤解するもう一つの原因は、「無知の知」という、ある意味でわけの分らない、否定的肯定という形式を伴った言葉にあると思うのです。ずばりと直接的に、「無知の知」の結果どうなるかを肯定的な言葉で語ってくれてはいけません。ここに、後世の多くの人が、誤解せざるを得ない原因があると思うのです。しかし、これを、だれにも抵抗無く受け入れて

もらえる言葉で表すことは、とても難しいのです。ソクラテスは、誤解されなかったために、ただ「無知の知」とか、あるいは「汝自身を知れ」とだけ言ったのではないかと

思うのです。

仏教における「空」の概念を確立した龍樹も、中論という本のなかで有名な「八不」という否定の積み重ねでこの空の概念を説明しています。(これについては、こころのとも第一巻十月号をお持ちの方はその「般若心経」の解説をお読み下さい)。実は「無知の知」であれ、「空」であれ、そのことの心髄を肯定の言葉で語ることは不可能なことなのです。それは、まさしく体験であり、

身体に備わった徳だからです。その体験のない人に、体験の話しても分かってもらえないものです。五感を通しての体験ならまだ類似の体験がありますが、全く抽象的な体験ですから分かることはとても困難です。また、言葉で表現したのを読んで、その言葉が理解できたりしますと、大抵の人は自分も体験をしたような気になって、よけいに執われを一つ増やすことになってしまうのです。一つ知識を増やして、無知の知からますます遠ざかって行くわけです。

しかし、誤解を覚悟で言わなければ、多くの人の誤解を解くことができません。でも、それは誤解を招くかも

しれない言葉で、誤解を解こうとするわけですから、
だいたい矛盾したことを言わなければならぬのです。

それをあえて表現しますと、それは、「生かされて生
きる喜びを感じる」とだと、私は思うのです。その喜
びを知ることだと言ってもよいと思います。

このことを、私の体験や意識に照らして、誰にでも分
かって頂けることで言えば、その一つは「私の一生は、
仏さまが予めプログラムされた通りに進んでいる」と心
から確信していることです。そして、実際に、全てを仏
さまにおまかせして生きて行っている、ということでは
また、もう一つ挙げてみますと、ときどき全身がしびれ
るような「エクスタシー」が訪れてくることです。「あ
あ、ありたがたい。もういつお迎えがきても、喜んで逝
ける」という思いがして、「仏さま、弘法大師さま、有
り難うございます」と思わず感謝することです。

密教修法の体験やヨーガの体験は余り一般性があ
りませんので、紹介するのは止めておきますが、右に述べた
ことでも、多くの人は、信じるのが出来ないかも知れ
ません。同じ体験のないものに、その体験を信じるこ
とはとても難しいと思うのです。

さて、ここで誤解を避けるために、もう一つだけ述べ
ておきたいことがあります。それは、知識を否定してい

ることについてです。多くの人は、知識を得れば得るほ
ど現実の生活をうまく送ることが出来ると考えていると
思うのです。でも、それには制限があります。多分それ
は、「経済的に豊かな」生活を送ることのためだけに役
立っただけではないかと思うのです。精神的な生活ではあ
りません。

精神的に役に立つためには、たった一つのこと「無知
の知」、「生かされて生きていること」を知るだけでよ
いのです。そのことが心から体験として分かったとき、
知識は無くても、現実の生活の中で間違いを犯すことは
殆ど無くなって来るのです。

人の本当の幸せは、経済的な豊かさの中にはありませ
ん。たとえ貧乏でも、心は豊かであることが出来ます。
昔に較べれば、今は世界中が知識も豊富になり、経済的
に豊かになっていると思います。なのに、人より（他の
国より）もっと豊かになろうと思って競争し、助け合う
どころか、争いや差別が絶えません。大量虐殺が到ると
ころで起こっています。人を平気で殺したり、人のもの
を平気で略奪しています。それは、経済的に豊かであつ
ても、あるいは知識は多く持っていて、心が貧しいか
らだと思ふのです。心が貧しければ、幾らでも過ちを犯
してしまうものなのです。それは、無知の知を知ろうと

しないからです。お互いが「生かされて生きている」だけの身であることに気付こうとしないからなのです。

もっと言えば、「知識を得たために」、いま人類は滅亡への歩みを早めているとさえ言えるのです。それは、核爆弾の製造法という知識の獲得です。人を殺すことを止められない人類が、一瞬にして幾らでも殺すことが出来る爆弾を持つことは、必ず、いつかは、誰かが、その爆弾を使うことを意味しています。ですから、今は、知識を得ることではなくて知識を捨てることを、ソクラテスの時代以上に、こうした面からも真剣に考えなければならぬ時代だと言えるのです。

標語的に言えば、知識を捨てて、自分を知らう。知と知識とは全く違うことを知らう。知は仏や神の知恵、悟りや解脱、覚醒の境地であることを知らう。

ソクラテスは、プラトン著の「ソクラテスの弁明」の中で、死刑の判決を受けた後五百一人の裁判官を前にして、次のように述べています。

* * *

「しかしながら、諸君にも、裁判官諸君、死というものに対して、よい希望をもってもらわなければならぬのです。そして善きひとには、生きている時も、死んでからも、悪しきことはひとつもないのであって、そのひ

とは、何と取り組んでいても、神々の配慮を受けないということは、ないのだという、この一事を、真実のこととして、心にとめておいてもらわなければなりません。・・・しかし、もう終わりにしよう、時刻ですから。もう行かなければならない。わたしはこれから死ぬために、諸君はこれから生きるために。しかし、われわれの行く手に待っているものは、どちらがよいのか、誰にもはつきりは分からないのです。神でなければ。」

* * *

人はどこから生まれて来て、どこへ死んでいくのか、誰も知らないのです。ソクラテスも知らないのです。無知なのです。人生で一番知りたいことなのに、誰も知らないのです。それが無知の知ということなのです。

でも、それを心と身体で知った人は、どこから生まれてきてどこへ死んで行くのか、気に掛ける必要がなくなるのです。ソクラテスがしたように自己の死さえ、他人の死と同じように客観的に受け入れることが出来るのです。いわば、永遠の命を一瞬に生き、一瞬に死んでいるのです。いつも、仏さまや神さまと同じ永遠の命を「いま、ここに、この自分が」生きているのです。真の安心や自由は、ソクラテスのように全ての自分への執われを捨てた時、無知の知を得た時、やって来るものなのです。

真言宗在家勤行式（19）

南無本尊界会（なむほんぞんかいえ）

南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんこう）

南無興教大師（なむこうぎょうだいし）

順に解説して行きたいと思えます。まず、三つに共通している南無ですが、これはサンスクリット語の namas（ナマス）の音写語です。漢訳は、帰命、帰敬、帰礼、敬礼、信徒などです。ですから、これを唱えることは、南無の次に来るものに、まごころをこめて歸依し、信心を捧げることを誓っていることとなります。

次に、本尊界会ですが、これは今拝んでいるそのお寺の本尊さんの属しておられる曼陀羅（まんだら）の集会（しゅうえ）のことです。わが心光寺のご本尊は、釈迦如来ですので、胎蔵界（たいぞうかい）曼陀羅を取ってみますと、釈迦院が本尊界会ということになると思えます。その釈迦院には三十九尊がおられます。ですから、南無本尊界会と唱えることは、それらの仏さま全てに帰依しますと誓っていることとなります。なお、釈迦院が胎蔵界曼陀羅のどこなのかは、第一巻五月号をお持ちの

方は「十三仏の紹介」をご覧ください。

次に、大師遍照金剛ですが、これは言うまでもなく弘法大師さまのことです。ただ、遍照金剛はもともとは大日如来の密号です。密号とは、神秘的な意味をもつ名前のことで、大日如来の光明が一切のところを遍（あま）ねく照らし、その体は金剛（ダイヤモンド）のごとく堅固で壊れないことを意味しています。さて、なぜ弘法大師さまがこのお名前になったかと言いますと、中国で恵果和尚から伝法灌頂（でんぼうかんじょう）密教の法を伝える儀式）を受けたとき、目隠しをして花を曼陀羅の上に投げますが、それが、胎蔵界と金剛界の両方とも大日如来に落ちたからなのです。

次に、興教大師（一〇九五―一一四三）ですが、このかたは死後に国から大師号が贈られるまで、覺鑊（かくばん）というお名前でした。たいそう偉い方で、生きていた時から、鑊（ばん）上人とか密巖（みつごん）尊者と呼ばれていました。一回でも難しいとされている、虚空蔵求聞持法（こくうぞうぐもんじほう）虚空蔵菩薩のご真言を百万回唱える修行）を九回も修法されました。高野山で活躍されていましたが、争いをきらわれ、根来寺（和歌山県）に降りられて、新たに新義真言宗をたてられました。いま、豊山派と智山派があります。

後記

一、こちらは、もう何度も雪が積まりました。今も残っています。でも今年は、少ないほうだそうです。

二、最近、チェンソーを買いました。さつそく、自分でエンジンをかけていて、足首と手をちよつとだけ傷つけました。椎茸をうるほだ木を切るのがおもな目的ですのに。栗の木を何本か、十一月だったかに切り倒してあります。種の菌も農協から届いています。

三、二月十六日（日）、この山城町政友校区の婦人会の寄り集まりで、講演をさせて頂きました。演題は先月号に随筆として載せました「より美しく老いるためには」でした。演題について予め書いておいたものを載せさせて頂いたものです。来賓として、町長、議長をはじめ数人の町会議員の方がいました。皆さんが、とても熱心に聞いて下さり、ありがたい限りでした。後で宴会をし、芸達者な方が歌に合わせて「芸」を披露されました。カラオケもあり、私も下手な歌をうたいました。楽しい一日でした。

四、二月二十日（木）の夜、山城中学校の体育館で全国を回っている「ふるさとキャラバン」のミュージカルを見ました。「村は三・三・七拍子」という題です。内容については、歌にして載せておきました。その中に芝居

で何回もギャグにして、おばあさんが言っていた「長生きするもんじゃあねえ」をもじって入れておきました。よいと言っている方も多いですし、私に勧めて下さった方もあり、評価はあまりしたくありませんが、正直いつてセックスの話題が多すぎたこと、何を言いたいのかわく分らなかったことが、印象に残りました。

五、いまは、「人格論」を書く準備として、心理学、教育学、哲学、宗教学などの本を毎日、暇さえあれば読んでいます。少しずつ、構想が具体化して行きます。新しい考え方を作るのとはとても楽しいものです。毎日、朝が来るのが楽しくて仕方ありません。

月刊 こころのとも 第三卷 三月号 (通巻 二十七号)	平成四年三月八日 〒779 53 徳島県三好郡山城町国政八三四 清心者寺院 心光寺 (沙門) 中塚 善成 <small>ぜんせい</small>
心光寺 口座番号 徳島9 53708	本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院

